立正大学心理学研究所紀要 第15号（2017） 67－78

日本の名付け習慣における変遷の全国的分布

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ（立正大学心理学部　専任講師）

On the distribution of changes in naming customs across Japan

UNSER-SCHUTZ, Giancarla（*Assistant Professor, Rissho University Faculty of Psychology*）

Abstract

Japanese naming practices have been changing dramatically in recent years, with many orthodox name-exclusive suffixes and other characteristics going into disuse. Instead, new names are characterized by their unusual usages of kanji. These new types of names have been widely taken up and problematized in the media, but it has not yet been confirmed whether these are nation-wide trends. In this article, I consider how naming practices have changed by using data from newsletters from 12 municipalities from the major regions of Japan for a total of 1,573 names were obtained. Analysis showed that names which used kanji in non-transparent, hard to use ways were common across Japan, coming to approximately 50% of all names. There were no major differences between the municipalities in this respect, and regional differences in their distribution were largely insignificant. One reason for this may be changes in interpersonal relationships affecting who is involved in the naming process, but changes in the information available when choosing names are also important. The development of numerous internet sources about popular baby names and ranking may also have allowed people to become more sensitive to changes in trends, encouraging them to select names largely in comparison with others in mind.

Key words：kirakira nēmu, DQN nēmu, onomastics, naming practices, kanji, regionalism

序　論[1),2)]

日本人の典型的な名前を挙げるようにいわれれば、多くの人がきっと男性名として「太郎」や「一郎」、あるいは女性名として「花子」や「良子」を挙げるであろう。実際に、出生届といった書類の記入例では、こういった名前が多く用いられる（例：いい名前ネット，2007；住民票ガイド，2014）。しかしながら、これらの名前が頻繁に使われているというわけではない。加入者の間に生まれた子どもの名前に関する統計を発表している明治安田生命のデータを参照すれば、「一郎」は1925年、「良子」は1935年を最後に上位10位に出現したが、残り２つの「太郎」と「花子」は、1912年から一切出現していない。名前そのものではなく、上記のような特徴的な名前も、衰退している。近年においては、名付け習慣が大きく変化しており、上記の名前に見られる名前特有の接尾辞・止め字（「－子」や「－郎」）が少なくなってきている。代わりに、読みを工夫した漢字用法を用いた名前が増えているという（佐藤，2007や徳田，2004等）。

名付けのこういった変化は各種のメディアにおいて幅広く取り上げられており、ときには厳しく問題視されている。だが、日本の名付け習慣の変遷は実に把握し難い。そのため、そのような変化が、全国的に見られる傾向なのかは未確認である。熊谷（2011, pp. 20-21）によって指摘されているように、ことに家族社会学者の間では日本の単一性が強調される傾向があるが、日本は実に地域性と多様性に豊富である。名前が親や親戚、それを超えるコミュニティにおいて機能し決定されることを考慮しては、必ずしも同じ傾向が日本全国に見られるとは限らない。しかし、日本の名付け習慣に関するデータはどれも明治安田生命のような二次的資料あるいはよくいえば準一次資料である。例えば、アメリカ合衆国は、社会保障局が豊富なデータを公開している。それと比べると、日本の名付け習慣を把握するのには、データ量が不十分である。また、日本では、名前の情報は基本的に戸籍に保管されており、これからも公開されることは期待できず、新しいデータ開拓が必要である。そこで、本研究においては、各地域の12か所の市町村の広報誌から抽出したデータを用

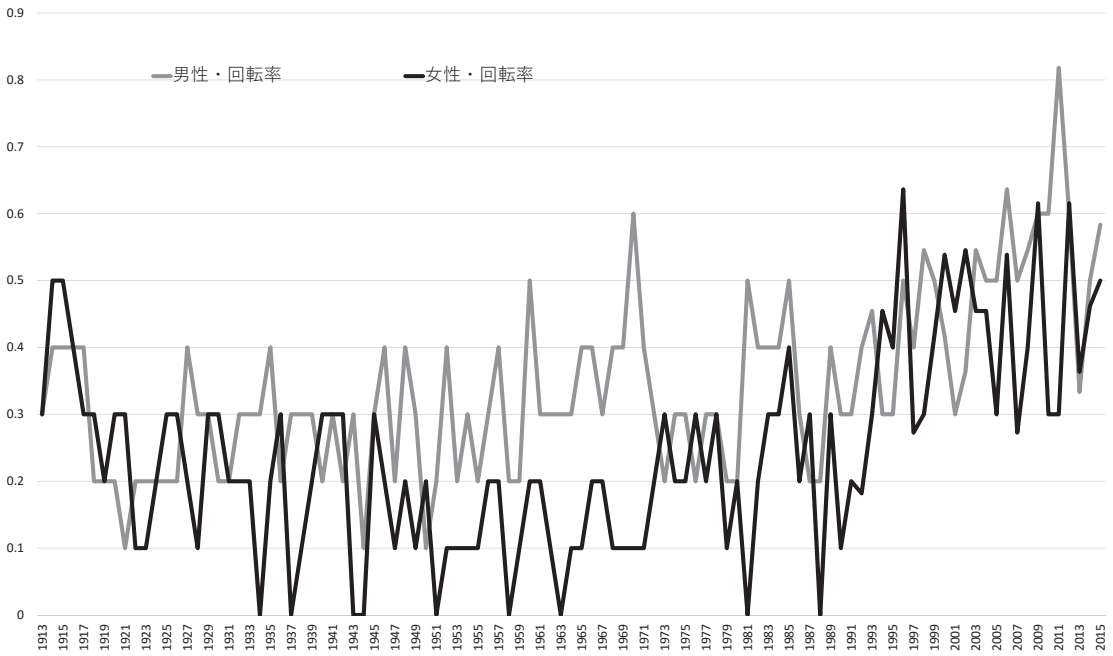

図１　人気な名前における回転率（Unser-Schutz, 2016より調整）

いることにより、近年の名付け習慣における変遷を確認するのみならず、広報誌を名付け習慣の変遷を観察するのに有効であることを証明する。

日本の名付け習慣における変化

日本の名付け習慣における変化を素早く把握するのに有効な方法は、最も人気な名前を観察することである。Unser-Schutz（2016）による図１は、上記で取り上げた明治安田生命のデータ（2015a, 2015b）を用い、1913年から2015年までの人気な名前における回転率、つまり、昨年度と比べ新しくランクインした名前の割合を示すものである。回転率が高ければ高いほど、昨年度流行した名前の人気が続かなかったことを示している。回転率が長期間高い値を保った場合、過去の最も人気な名前がほとんど見られなくなったと考えられ、変化が発生していると推測することができる。20世紀半ばにおいては、男性名も女性名も低い回転率を示し、とくに女性名は1934年から1988年まで数回０％、つまり最も人気な名前には新しいものが一切現れないという状況が見られた。1990年代に入るにつれ、回転率がまた上昇しだし、2016年現在の直近数年においては変わらず高い回転率が見られる。これらの結果から、日本の名付け習慣が変わりつつあることが読み取れ、名前がより多様になっていると考えられる。

現代においては、名前に平仮名と片仮名を用いることは可能だが、日本の名前は漢字で書かれることが一般的である。英語等の諸言語と比べ、日本語は新しい名前の創造に柔軟だが（本田, 2005）、止め字を用いる他に、異なる漢字で差異化することが多い。1990年代までは、多くの名前は止め字を用い、持ち主の性別を示したのだが、その一例を図２に示す。二つの読み方が可能な語幹「裕」に止め字を付けることにより、最低でも６つの３泊の名前が想像できる（《ひろき》《ひろみ》《ひろこ》《ゆうき》《ゆうみ》《ゆうこ》）。また、男性名に関しては名前特有の訓読み・名乗り訓を用いれば、４拍の名前（「裕孝」《ひろたか》）が作れる。な

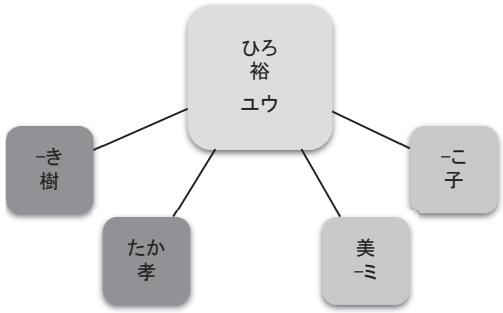

図２　接尾辞と語幹を用いた新しい名前の作り方（訓読み・名乗り訓は漢字の上に平仮名で、音読みは漢字の下に片仮名で表記）

お、以下より名前の漢字表記を鍵カッコ（「」）、名前の発音を二重山カッコ（《》）で表す。

上記の特徴は、必ずしも長い歴史を持った伝統的なものではない。寿岳（1990）が指摘するように、漢字が女性名を表記するために広く用いられたのは明治時代に入ってからである。また、「－子」の付く名前が、典型的な女性名だとされる傾向が強く、実際に1920年代には90％以上の女性名は「－子」の付く名前だったという研究結果が報告されている。しかし、明治時代までは「－子」の付く名前は貴族にしか用いられなかった（小森, 2002）。「－美」といった典型的な止め字も、「－子」の付く名前の衰退後に普及したようだ（Unser-Schutz, 2016）。男性名も、多くの変化を受けてきた事実がある。明治時代に入るまでは、（主に貴族の）男性が一生涯を経て複数回改名することが一般的であった。しかし、明治時代に改名に対する規制が実施された後、幼少期に用いられる幼名や少年期に用いられる若名、青年期の実名が、男性の唯一用いられる名前として利用されるようになり、「…ここに他の国には見られぬ混雑が現れている」（柳田, 2014, p. 122）。男性名に用いられる止め字や、男性名に用いられる字数にも時代的変遷が見られた（小森, 2002）。

しかしながら、20世紀は名前における標準化の時代だともいえる。ことに、下記の二つの大きな変化が重要であった。第一の変化は、1872年に通過した法律の２つにもたらされた。それらにより、名前を一つのみ選ぶこと、また改名を禁止することが決定された結果として、それまでの習慣に終止符が打たれた。第二の変化は、1948の戸籍法改正によってもたらされた。第二次世界大戦後、日本語の表記法の単純化の目論みとして、人名に用いられる漢字が戸籍法の改正によって規定され、３年後の1951年に人名用漢字が初めて定められた。これらの法律は、名前を創造する範囲を縮小させたのみならず、名前を付ける際の制限的枠組みとしても機能したと考えられる。名前に用いられる漢字の制限は、名前が常用平易であるということが望ましいとされる中で決定されたことであり、日本語の表記法における民主化の一部として位置づけられていた（詳細については円満字, 2005を参照されたい）。これらの動きの結果として、20世紀半ばのランキングにおける回転率の低さおよび止め字を含む構造的特徴に見られるように、最も人気な名前は相互的に類似していたのである（Unser-Schutz, 2016）。

一方では、近年においては過去人気だった止め字やその他構造的特徴が衰退していることが幅広く報告されている。ことに「－子」の付く名前は甚だしく減少しており（小森, 2002；小林, 2001）、「一郎」や「二郎」に見られる「一」と「二」のように、生まれ順を表す要素も、喪失したも同然である（本田, 2005）。同時に人名用漢字のリストが数回改定されており、名前に用いられる漢字が増加している。上記で観察したような特徴の代わりに、近年の名前は、漢字の用法に見られる工夫で特徴づけられている（佐藤, 2007；徳田, 2004）。具体的に、近年の新しい名前は、（１）漢字の音読みや訓読み、名乗り訓の同一名における混雑、（２）一般に認められていない当て字的な読み、（３）一般に認められている読みの変化、（４）音声的に貢献しない空的用法に特徴づけられている（表１）。

漢字は元々音声的透明度が低く、十分な文脈がない限り名前以外の単語でも読みにくいことが多い。だが、近年の新しい名前と比べ、一世代前の名前の方が、読みやすかったという仮説が立てられる。一方、表１のような非標準的な用法が、読みの推測を困難にすると考えられる。そのため、一般に新しい名前が比較的読みくいとされている（佐藤, 2007）。他方、以前は類似したものが多く、同一名前に複数回出合うことがより多かったと考えられる。個々人が様々な名前に出合い、累積してきた経験がより有効なものであったろう。また、止め字といった固定的な構造上の特徴も、名前の読みを推測する際に役立ったと思われる。実際に、読みにくいとされている種類の読みを用いるという、新しい名前に属する子どもの名前と比べ、現在の傾向の前に生まれて名付けられたという親の名前の方が一貫した読みで読まれることが多いことが確認されている（Unser-Schutz, 2012）。

近年のこういった読みにくい名前に対する反応は全

表１：新しい名前の例

表記的形	音声的形	性別	漢字の読み方
夢徠	ゆら	女性	１）訓読みの省略：「夢」《ゆめ》から《ゆ》 ２）音読みの省略：「徠」《らい》から《ら》
心桜	こころ	女性	１）訓よみ：「心」《こころ》 ２）音声的貢献なし：「桜」は読まれず
夢叶	ゆいと	男性	１）訓読みの変更：「夢」《ゆめ》から《ゆい》 ２）当て字的読み：「叶」《きょう》から《と》

体的に批判的なものであり、よほど芳しくないものと思われているようだ。Unser-Schutz（2015）にて観察したように、新しい名前は社会的に機能せず、周りに対する負担が重い上、持ち主の子どもに対する影響が、面接といった場においては否定的なものとされている。こういった新しい名前を指すために様々な新しい用語が出てきたのだが、機能よりもユニークさを重視したことを皮肉る「キラキラネーム」や、名付け側の教養を問題視する「DQN（ドキュン）ネーム」という二つの用語は、まさに新しい名前に対する一般的な態度を表しているであろう。なお、本研究においては、「DQNネーム」のみならず、「キラキラネーム」というネーミングには批判的な意味合いも含まれていることを考慮し、曖昧ではあるが近年の問題視されている類の名前をあえて「新しい名前」と呼ぶことにする。

地域差と名付け習慣

地域差と人名の関係は、名字と名前とでは大きく変わるのである。一方では、頻繁に見られる名字は地域によって異なり、持ち主の背景について様々な情報を示して、ことに日本の場合、地域差に関する洞察を与えることが多い（Cheshire, Longley, Yano, & Nakaya, 2014）。しかしながら、名字は名前ほど流行の影響を受け難いのである。現代日本においては、名字の変更は原則として結婚を通してのみ起こるものである。結婚したカップルは、夫婦として新しい戸籍を作ることになることより、同一名字でなければならない。例えば、アメリカ合衆国では両配偶者の名字を合わせたもの等を用いるが、日本ではそれが認められておらず、その結果として、結婚を機に片方が必ず配偶者の名字を用いることが義務付けられる。国際結婚や外国人の帰化に伴い、新しい名字が戸籍に入り、少しばかり名字の総数が拡大することがある。ことに国際結婚の場合、日本国籍の配偶者が外国籍の配偶者の名字を用いることが認められている。また、帰化をした場合、外国人が必ずしも和名を選ぶ必要はないものの、日本語の表記法に合わせる必要があるため、新しい名字が使われるようになることがある（Murphy-Shigematsu, 2000を参照）。だが、こういった例外を除き、新しい名字を作る・選ぶことは、ほとんど不可能である。また、名前と比べ、名字の使用が義務付けられたのは人名用漢字の規定前に決定されたことであるため、名字に用いられる漢字に関する制限は原則としていない。

他方では、名前が果たして地域によって異なるのかが明らかではない。いうまでもなく、言語的・文化的・民族的に異なる集団の間では、名付け習慣が異なることがある。その一例はアイヌの名前であるが、沖縄においても、本島では見られない伝統的な名付け習慣があり、ことに3つの名付け制度（沖縄の名前・和名・中国名）が同時に存在していた（アイヌと沖縄の名付け習慣については大藤, 2012を参照）。明治時代以前、和人の間でも名前には名字に類似している役割があったという指摘もある。江戸時代においては、百姓には名字を名乗ることは認められていなかったが、名前を通して、持ち主を村の構造に当てはめ、集団の属性を明らかにすることがあった（Plutschow, 1995, p. 177）。歴史的にも、頻繁に見られる名前には傾向があったとはいえ、地域によって差が見られたことも確実である。例えば、江戸時代後期においては、全国的に共通の女性名が多かったが、特定の地域においては女性名が多様性に豊富な地域（越前國や伊勢國、備前國等）もあった（角田, 2006, pp. 405-407）。方言の発音による差も、名付けに現れることがあるようだ（日高, 2005, pp. 28-29）。

しかし、Plutschowの指摘する名前の特殊な機能は、名字の登録を義務付けたという1875年の法律により不要になり、後の社会的標準化の傾向に伴い、名前を通して地域性を表現するという希望が薄れた可能性がある。多様性に富んだ女性名の多くが、明治時代には継承されず（角田, 2006）、必ずしも現在にいたる明確な地域性にはつながらなかった。実際に、後の名前に用いられる漢字の規則も、地域性を制限したであろう。ことにその背景に日本語の表記法の民主化があることを考慮しては、地域性を制限することこそが、名前に用いられる漢字の規則の目的の一つだったと考えられる。20世紀の方言撲滅運動による方言格下げで、名前も含めて、ことばを通した地域差を表すことに対する抵抗が強まったと考えられる（方言に対するイメージについては、金沢, 1991を参照されたい）。

だが、近年における社会的変化に伴い、名前を通して地域差を表すことに対する抵抗が少なくなってきてもおかしくない。上述の通り、人名用漢字のリストが全部で12回改訂されてきたが、そのうち9回は1990年代以降に起こった。現在、常用漢字の2,136字および人名用漢字の862字を合計すれば、名前における漢字制限が実施されて以来最大の数である。名前に用いられる漢字の拡大の裏には、希望における変化と、一般の欲求以外にも、デジタル社会においては管理上の事務的理由から厳守に制限する必要がなくなってきたという意識もある（円満字, 2005）。また、近年において地域性に対する態度が改良され、より肯定的に受け入れる傾向が強くなってきた中、方言に対する態度も、20世紀冒頭～中旬と比較して非常にポジティブになっている（国語政策における方言の位置付けの変化について、Carroll, 2013を参照されたい；若者の間における方言の評価的変化について田中, 2011が興味深い）。

上記のことから、名前を決める際にも地域差を表現することに対する抵抗が少なくなったと考えられる。実際に、人名用漢字を改定する動向にもなった例が過去にある。1997年に、沖縄にいる新生児の親が、「琉」の字を使った名前を地元の役所に届けた。だが、親が告訴を起こした結果、沖縄の歴史的背景踏まえ、「琉」という字が名前に用いられる漢字が常用平易である条件を十分に満たしている、よって「琉」の使用を認めるべきであるという判決が下った。最終的に、この判決が「琉」の人名用漢字への追加にもつながり、名前を通して地域性を表現する裁判前例になりかねない（詳細について安岡，2011を参照されたい）。

しかし、こうした態度変化をさておきにしながらも、最近の名付け習慣に地域差を期待させるようなことは、現時点では報告されていない。上記で触れた地域新聞の記事以外にも、2015年２月23日放送の「SMAP X SMAP」のコーナーで、「イマドキNAME QUESTION」というタイトルでキラキラネームが取り上げられたように、キラキラネームはテレビ番組やその他のメディアにも幅広く取り上げられてきた。これらからわかるように、キラキラネームは全国レベルで注目を浴びており、少なくとも問題意識という面では、一つの地域のみに見られるものだとはいえない。実際に、こうした新しい名前が、地方にも見られていることがすでに報告されている（佐藤，2007）。しかし、新しい名前が普及したことを説明する俗説が複数存在しており、それぞれの俗説によっては、地域差が見られるのかに対する予測が異なる。

一方では、新しい名前に対する好みは、教育という問題とかかわっているように思われている。もともと、新しい名前を付けることは、教養がない、知識がないという捉え方がDQNネームというネーミングから読み取れる。階級社会といわれているイギリスに対し、日本では階級意識が薄く、言説におけるアイデンティティの標識としてはそれほど機能しない（Ishida & Slater, 2011, p. 25）。だが、日本の場合、教育と地域性の関係が根強く、また社会的階層ともかかわっている。ことに高等教育機関が都市部に集中しており、さらに集中する方向に動いている（Mock, 2016）ことは、地方部に新しい名前がより多く見られるのではないか、という仮説を示唆する。すなわち、新しい名前を付けているのは、漢字の使い方に対する知識が欠如しているからだとすれば、新しい名前は平均的最高学歴がより低い地方部に見られる、という推測をすることができる。他方では、新しい名前の普及が、公的な場に対する意識における変化に由来しているという指摘も見られる（小林，2009）。また、日本の名付け習慣における変化は、個人主義的価値観の普及との相関があることも報告されている（Ogihara et al., 2015）。都市化に伴い、日本社会と人間関係が大きく変わった（赤枝，2011）こと、また都市部が地方部より急速に変わることを踏まえては、新しい名前がむしろ都市部に多くみられるのではないかという仮説にたどり着く。こうして矛盾した仮説が２つ出てくるのだが、どちらが正しいのか、あるいはどちらも正しくないのかを確認することで、日本における名付け習慣の変化のみならず、社会変化と日本社会における地域性の有り方に対する理解が促進されるであろう。

本調査の概要

新しい名前の全国的分布を確認すべく、本研究においては日本の各地方から合計して12市町村に見られる名前の傾向を分析した。佐藤（2007）に従い、対象のデータは市町村の広報誌から抽出したのである。子どもをコミュニティに紹介するというコラムが多くの広報誌で連載されており、主に出生を祝うものと、親からの子どもに対する思いを伝えるものになっている。広報誌のデータを利用する利点は何よりも、紹介という側面が大きいためか、基本的に子どもの名前に振り仮名が付いており、読みが曖昧だという日本の命名事情を研究する際の大障壁がないことにある。また、あくまでも二次的データではあるが、広報誌が戸籍を管

表２　「広報きょうたんご」よりの一例（振り仮名は原文のまま）

メッセージ	名前（性別）	生まれ月・体重	親の名前	地域
元気に生まれて来てくれてありがとう	安田大成（たいせい）（男の子）	２月・3,020	母：智美 父：三起弥（みきや）	網野町浅茂川
元気に産まれてきてくれてありがとう。	堀琴々愛（ここね）（女の子）	２月・3,180	母：加枝子 父：博文（ひろふみ）	大宮町周枳
元気に生まれてきてくれてありがとう。みんな楽しみにしていたよ。これからよろしくね。	左司明李（さしあかり）（女の子）	２月・2,864	母：佑希恵 父：健（たけし）	丹後町中浜

表３ 「広報おおしま」よりの一例

赤ちゃん	父・母	月／日	住所
岡本 優菜（ゆうな）	公秀・江里	2 / 9	（差木地）
大澤 愛菜（あいな）	由照・晋子	2 /11	（波浮港）
金子 和波（かずは）	享平・常美	2 /19	（元町）
金子 瑛太（えいた）	公仁・百合香	2 /26	（差木地）

理している市町村の行政機関によって発行されているため、比較的信憑性が高いとも考えられる。京丹後市の「命の絆」というコラムの2014年４月の一例を表示する表２と、大島町の「広報大島」の「お誕生おめでとう」というコラムの同月の一例を表示する表３からわかるように、広報誌の子どもを紹介するコラムから得られるデータは実に豊富であり、名前のみならず、子どもの将来に対する希望や、望まれている子どもとの関係も読み取れる。また、親の名前も載っていることから、世代による名付けの差も確認することができ、バックナンバーを活用することにより、名付け習慣の傾向を過去に遡って調査することも可能である。

本調査の対象市町村は、市町村の広報誌へのリンクを収集した jichitai.com に当時掲載されていた1,020部の広報誌の調査の結果を活用し選抜した（Unser-Schutz, 2014b）。調査された広報誌のうち、50.39％が出生届または親からの手紙というコラムが掲載されており、また掲載があったコラムのうち、97.28％に子どもの名前に振り仮名が付いていた。日本の各地方（北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州に加え、沖縄から、対象のコラムがあった最大の市町村を対象に選抜した。さらに、補助データとして他研究の対象としていた３つの市町村も対象に加えた。東京が中心だという関東地方から市町村を２つ、また対象として選抜された北海道の中規模の市町村の他に北海度の小規模の市町村を１つ対象に加えることにより全体的なバランスをはかることも、補助データとして追加することの狙いでもあった（表４）。

対象は2013年４月から2016年３月の間に発行された広報誌にし、名前が総計1,573個（女性名：705個、男性名:868個）得られた。すべての名前を、表記上の特徴と漢字の用法によって分類した。具体的に、読みにくいと考えられる用法の名前を「不透明群」とし、読みやすいと考えられる用法の名前を「透明群」とした。不透明群は、（１）いわゆる重箱読みの、音読みと訓読みを混ぜた名前、（２）従来の、一般的に認められている読みを省略・変更したもの、（３）音声的に貢献をせず、読む必要のない漢字、（４）当て字的な読みを含ものとした（表５）。透明群は、仮名を用いた名前、もしくは重箱読みが見られないものとした。なお、本調査においては通常ならば送り仮名として書かれるはずの活用語尾が、送り仮名として書かれず漢字一つで読ませる場合（例：「結音」《ゆいね》における《ゆい》）、読みを変更したものと見なしていない。同様に、形容

表４ 対象の市町村（北南順）

■：補助データの対象市町村
▲：コラム中止のため、豊川市のデータは2015年３月まで
*, #, $：2016年６月の時点での最新人口情報；「*」―８月末の情報、「#」―８月１日の情報、「$」―９月１日の情報

地域	都道府県	市町村	データの種類	人口
北海道	北海道	恵庭市	我が家のアイドル	69,200*
北海道	北海道	乙部町■	我が家のアイドル	3,932*
東北	岩手県	一関市	我が家のアイドル	121,473$
関東	茨城県	古河市	我が家のアイドル	144,338$
関東	埼玉県	伊那町■	我が家のアイドル	44,437$
関東	東京都	大島町■	出生届	8,053*
中部	愛知県	豊川市▲	我が家のアイドル	182,884#
近畿	京都府	京丹後市	我が家のアイドル	57,009*
中国	岡山県	早島町	出生届	12,305$
四国	高知県	土佐市	我が家のアイドル	27,956#
九州	熊本県	天草市	我が家のアイドル	84,350#
沖縄	沖縄県	宮古島市	我が家のアイドル	54,265*

表５　名前の分類法と例

種類	表記的形	音声的形	性別	読みの特徴	表記上異なる名前（同一発音）	発音上異なる名前（同一表記）
(1)	唯音	ゆいね	女	「唯」の音読み《ゆい》 「音」の訓読み《ね》	結音	ゆの
(2)	奏音	かのん	男	「奏・でる」の訓読み《かな・でる》から《か》 「音」の音読み《おん》を変更した《のん》	花音	かなで
(3)	結愛	ゆい	女	「結・い」の訓読み《ゆ・い》（送り仮名ごと） 「愛」は読まれない	優衣	ゆあ
(4)	大翔	ひろと	男	「大」の名乗り訓《ひろ》 「翔」は当て字的に「と」（訓読み《かける》の類語《とぶ》から？）	翔斗	まさと

詞の語幹だけが用いられたときも、変更として見なしていない（例：「若羽」《わかば》における《わか》）。上記の他に、各市町村に対して（１）表記上異なる名前の総計数およびその延べ数・平均出現数、（２）発音上異なる名前の総計数およびその延べ数・平均出現数を算出した。

なお、本調査の対象市町村を選抜するために実施した2014年の広報誌調査において、市町村の人口と名前のデータを含むコラムの有無に対する負の相関が見られた。一般的に、人口が大きければ大きいほど、対象のコラムが見られないという傾向があった。大規模の市町村の広報誌にそういったコラムが掲載されないのは、実用的な問題、つまり毎月生まれてくる子どもの人数が多すぎる、ということが考えられる。また、表２および表３から観察できるように、大規模の市町村の方が、プライバシーと個人情報の問題により敏感だという可能性がある。最後に、広報誌でコミュニティの子どもを紹介することにより、町が子育てによく、活発であることを表現し、言ってみれば町の「健康状態」を大きくアピールする必要性が感じられないことも考えられる。

結　果

名前の出現数

抽出された1,573個の名前のうち、1,309個の名前（全名前の83.21％）が表記上異なった。同一表記で２回以上見られた176個の名前のうち、17個が同一市町村で見られ、160個が異なる市町村で見られた。その160個のうち、２つが、同一市町村に２回以上、かつ異なる市町村にも見られた。出現数が最も多い名前は「陽向」「湊」となった。「陽向」は全部で７回出現したが、どれも《ひなた》という読みであった（女性名・２つ、男性名・５つ）。同様に、「湊」は全部で７回出現したが、どれも《みなと》という読みであった（男性名・７つ）。同一名前が複数回見られることが最も多かった市町村は早島町となり、5.69％の表記上異なる名前が複数回出現した。恵庭市・宮古島市・豊川市においては、同一表記の名前が複数回見られることは一度もなかった。だが、この３つはどちらも最も対象のデータが少ない市町村であり、他の市町村と比べて有意な差が見られなかった（$\chi^2(11) = 14.828$, ns）（表６）。

表記上異なる名前と比べ、発音上異なる名前が706個に留まり、全1,573個の名前の44.88％が発音上異なるものという結果となった。この結果から、同一発音の名前が異なる表記で繰り返して表れている、ということが読み取れる。発音上異なる名前のうち、283個が複数回見られた。15個が同一市町村、268個が異なる市町村において複数回見られた。後者のうち、112個が同一市町村およびその他の市町村の両方に見られた。最頻の発音上異なる名前は《はると》および《ゆうと》であった。《はると》および《ゆうと》はそれぞれ19回出現した。表記上異なる名前と発音上異なる名前の個数に見られるギャップから予測できるように、両名前が複数の表記で見られた。具体的に、《はると》は12の異なる表記（「暖翔」「陽音」「遙斗」等）で見られたのに対し、《ゆうと》は14個の異なる表記（「優翔」「悠杜」「雄大」等）で見られた。同一発音の名前が最も頻繁に見られた市町村は早島町（24.22％）に次いで天草市（23.81％）となった。同一表記の異なる名前が最も頻繁に見られた市町村と同様に、同一発音の名前が最も少ない市町村は恵庭市（なし）と豊川市（4.26％）となった。他の市町村と比べ、恵庭市と豊川市の異なる発音の名前の割合は有意に低かった（$\chi^2(11) = 42.216$, $p < .01$, $V = .181$）が、恵庭市と豊川市はどちらもサンプル数が少なく、クラメールの連関係数からその効果が弱いことが読み取れる。

表６：異なる名前の総数（北南順）

１回：１回のみつかわれた名前の数、２回＋：２回以上使われた名前、ユニーク：異なる名前の全数、複数回：複数回使われた名前の全名前の％（２回＋/ユニーク）

市町村	表記上異なる名前				発音上異なる名前				総計数
	１回	２回＋	ユニーク	複数回	１回	２回＋	ユニーク	複数回	
恵庭市	31	0	31	−	31	0	31	−	31
乙部町	58	1	59	1.69％	48	6	54	11.11％	60
一関市	109	3	112	2.68％	85	13	98	13.27％	115
古河市	49	1	50	2.00％	42	4	46	8.70％	51
伊那町	104	4	108	3.70％	87	12	99	12.12％	112
大島町	134	4	138	2.90％	114	13	127	10.24％	142
豊川市	49	0	49	−	45	2	47	4.26％	49
京丹後市	180	4	184	2.17％	126	28	154	18.18％	188
早島町	265	16	281	5.69％	169	54	223	24.22％	298
土佐市	167	1	168	0.60％	120	22	142	15.49％	169
天草市	295	8	303	2.64％	176	55	231	23.81％	311
宮古島市	47	0	47	−	41	3	44	6.82％	47
全体	1,133	176	1,309	13.45％	423	283	706	40.08％	1,573

読み方による名前の市町村別分布

より読みにくいと思われる不透明な読みを用いた名前は、全名前の56.58％を占める結果となり、一般的な現象だと思われる（図３）。不透明な名前が最も少ない市町村（恵庭市・45.16％）と不透明な名前が多い市町村（一関市・65.22％）の間にギャップがあったが、この結果からもわかるように、どの市町村においても読みにくいと思われる名前が見られる、またどの市町村においても読みにくい名前が極めて少ないということはない。実際に、市町村の分布における有意な差が見られなかった（$\chi^2(11) = 11.894$, ns）。男性名については、市町村による有意な差が見られなかったが、女性名について京丹後市と土佐市の間にのみ有意な差が見られた（$\chi^2(11) = 22.896$, $p < .05$, $V = .180$）。だが、発音上異なる名前の分布と同様に、クラメールの連関係数が低く、強い相関はなさそうである。

考　察

以上の結果から、読み方が不透明という名前が全国的に頻繁に見られることが確認できた。不透明な読み方の名前が全名前の50％以上を占めていること、また市町村による差がほとんど見られなかったことを踏まえ、読みにくい名前の分布に地域差が見られるとは言い切れず、むしろ全国的に読みにくい名前が多いことが明らかになった。しかしながら、不透明な読み方が多く見られるからとはいえ、名前がすべてユニークというわけではない。発音上異なる名前の個数が、表記上異なる名前より少なかったことから、ユニーク性は主に表記に見られることであることが読み取れる。また、同一表記の名前の分布が、対象の市町村内の多様性は、市町村間の多様性よりも多いとは言い切れないことを示している。つまり、どの表記の名前であっても、同一市町村で複数回を見る確率は、改めて別の市町村で見る確率とはほとんど変わらず、いずれの場合でも極めて低いのである。反対に、どの発音の名前であっても、同一市町村で複数回を見る確率は、改めて別の市町村で見る確率とはほとんど変わらず、いずれの場合でも表記上異なる名前よりも高いのである。つまり、それまで出合った名前と比べて表記上異なる名前に出合う可能性は、発音上異なる名前より高いのである。こういった結果から、名前の表記を決めることは、名前の発音を決めるよりも私的な活動であることが示されているであろう。こうしたバリエーションが多いことは、日本の名前の特徴の一つとされているが（本田, 2005, p. 59）、全名前の割合として増えているようだ。一歩進み推測するのであれば、この結果から「名前らしさ」の幅、つまり名前として適切だとされているものの許容範囲は、発音よりも表記の方が広い、といえるであろう。

また、地方には新しい名前がより多いという仮説と、都市部とその郊外に新しい名前がより多いという仮説はどちらも支持されなかった。むしろ、地域に関係な

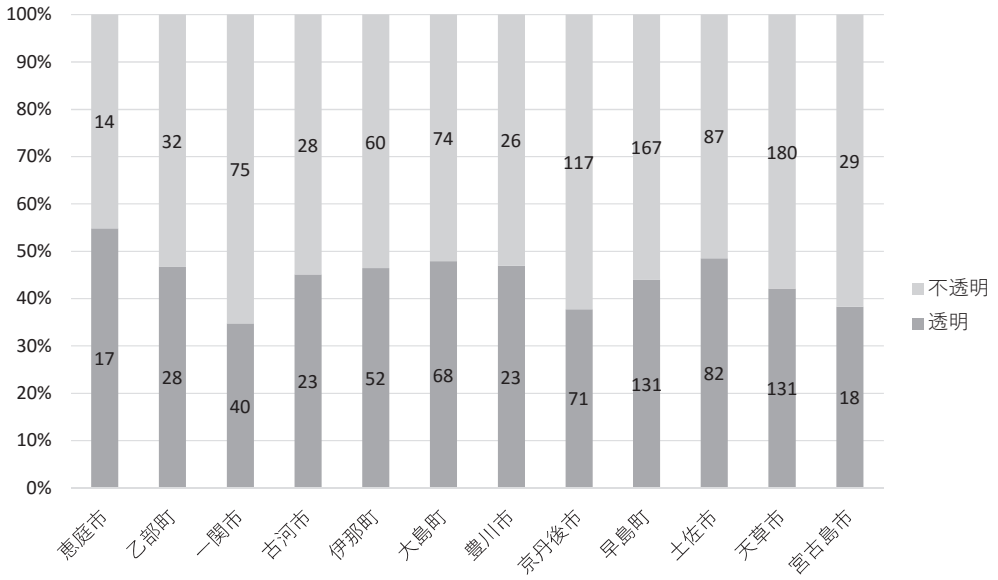

図３　漢字の用法による市町村別分布（北南順）

く新しい名前が日本全国中に浸透していることが明らかであり、特定のコミュニティとの関係性も、少なくとも地方とはつながっていないようだ。新しい名前の全国的普及は、名前の傾向が変わったという事実以外にも、名前を決める際に重視することが変わったことを示唆している。近年においては親・他の子ども以外の祖父母を含む親戚を名付けに関わらせるということが少なくなっており、主に核家族内で決めることが一般的のようであり（Unser-Schutz, 2014a）、家族関係における変化を示唆している。

だが、他方では、新しい名前が全国的に浸透していることを考慮しては、名付けの際にし、親が物理的に近いコミュニティの範囲を超え、名前の決め方に関する情報を求めていることが読み取れるであろう。初出産の平均年齢が、2014年の時点で30.6歳となっていること（内閣府, 2016）、また新しい名前が早ければ1990年代の半ばに始まった傾向であること（小林, 2009；Unser-Schutz, 2015）を踏まえ、近年の新しい名前の付けられた新生児の親自身が、新しい名前の持ち主だとは考え難い。そうだとすれば、新しい名前を付けている親は、同世代の人や年上の親戚を含む周りにいる大人の名前と同類の名前を付けている可能性が低い。自分達が所属している大人のコミュニティに見られない名前を付けていることは、名前を付ける際の参考にしている情報が、地元のコミュニティに由来するものではない可能性が高いことを示唆しているであろう。極端な推測をすれば、あえてまわりの人と同類の名前を付けていない、つまり、まわりの人の名前を否定的な参考にし、ユニークな名前を選択している、とも考えられる。

上記の変化はまた現代社会において、情報がどう普及していくのかを反映しているであろう。今日ほど名前を付ける際の情報やアドバイスに溢れていた時代は歴史的にない。西東社編集部（2014）の『赤ちゃんの名前ハッピー漢字事典』や清水（2016）の『コピーライターが教える 子どもを幸せにする名づけのコツ』のように、毎年名付けに関する書籍が数多く出版されており、名付けに関する多様な情報を入手することが極めて簡単である。名前に関する情報が増加したのは、戦後以降、テレビを含む情報器の普及だとされているが（本田, 2005）、小林（2009）によると、現在の名付け習慣を促進した最も有力な資料は、ベネッセ社の『たまひよ』という本であった。『たまひよ』は、もともと妊娠・育児雑誌の『たまごクラブ』にルーツがあり、1993年に出版されたのだが、特徴として、名前に関する情報が豊富であり、ユニークな名前を付ける最古な促進例の一つである。小林の指摘の通り、親が参考として活用できるように、『たまひよ』が数多くの名前を紹介していた上に、それらの名前を通し、名付けの流行における変更を報告して、今どきとでもいうべき名前を付けるように促進していた点で、当時においては非常にユニークな資料となっていた。名付けの流行に対して敏感になることを可能とすることにより、『たまひよ』がそれまでになかった名付け法を提供し、名付

けることを地元のコミュニティを超える全国レベルの活動として位置づけられた。

いうまでもなく、現在においてはこういった紙媒体のもののみならず、多くのデジタル資料も存在している。明治安田生命が公開している情報がその一例だが、ベネッセ社も『たまひよ』の読書からの名付けに関する自己報告データも公開しており、名前のランキングに関する情報が増えている。今では、ベネッセ社の名付けに関するデータが明治安田生命と並べての重要な資料となっており、上記で触れたOgihara et al.（2015）がまさにベネッセ社のデータを活用している。明治安田生命やベネッセ社のデータは、基本的に年に一度前年の流行を紹介する形で公開されているが、より頻繁に更新されているものも多い。DQNネームという用語の普及に大きくかかわり、批判的な名前を収集しているdqname.jpが、その否定的な一例である。だが、その他にも、より積極的な形で名付け親のサポートをするサイトが多く、ことにお名前辞典（http://name.m3q.jp）や赤ちゃん命名ガイド（http://b-name.jp）のように、ユーザーがいつでも名前を登録することができるネット辞典が増加している。

Lieberson（2000）が指摘するように、マス・メディアの名付けに対する影響力は測り難く、多くの場合、他の社会的変化が関与している。だが、流行に関する情報は、また違う影響力があると考えられる。ことに紙媒体の辞典と比べ、ネット辞典が随時更新されているため、ユーザーが流行における微変に対しても敏感になる。つまり、こういう名前もある、というアドバイスに類似した機能するだけではなく、他者との比較の中で名前を選択することが促進される。本研究のように、名付けの傾向や流行をまとめること自体が、名付けの変化にも影響を及ぼしている可能性が大いにある。ランキングを付けること、またそのランキングをさらに分析することが、名前の捉え方を変化させる。それは場合によって、「みんなと一緒がよい」から、同じものを選ばせる働きとして機能することもあれば、反対に、現在のように「みんなと一緒ではない方がよい」という考え方を可能にする。

結　論

本研究で明らかになったように、新しい名前は全国的に使われており、今では子どもに付けられている全名前の高い割合を占めている。その結果として、明確な地域差が確認されず、名付けの傾向が変わった裏に、人間関係や情報の普及法における変化があることを主張した。しかし、これで決定的に地域差がないと果たしていえるのであろうか。広報誌を名前研究のために用いる可能性が十分に示されたが、本研究で取り扱った市町村によってサンプル数の差が大きかったことが否めない。人口が少ないほど本研究の対象にしたコラムが掲載されている確率が高くなる、また各刊に掲載される子どもの紹介・出生届の数が市町村の規模ともかかわっていることより、サンプル数にばらつきがあることはある程度やむを得ない。現在は、より適切な比較ができるように、バックナンバーの追加入力に努めている。

また、本研究においては名前を一つの単位として扱い、市町村の比較を行ったが、名前の内的特徴における差は確認していない。「琉」が人名用漢字に追加された過程からもわかるように、歴史的に地域と親密な関係がある漢字もある。だが、名前に用いられる漢字の全国的制限がある中で、それらが必ずしも明確な地域差につながるとは限らない。なくとも本研究に用いたデータを見る限りでは、「琉」は沖縄の名前に特別に多いとは断言できない。確認した結果、「琉」の字を含んだ名前が27個あったが、そのうち３つしか宮古島市の名前に用いられていない。こういった地域性の有無を確認することが、一つの大きな課題であろう。

しかし、地域によって差がそれほど示されていないことは驚くべきことではない、とも考えられる。そもそも、近年の新しい名前がメディアに幅広く取り上げられている理由は、一般化しているからだと考えられる。新しい名前に対する社会的批判と問題視は、Slater（2011, p. 163）が述べた「フリーター」に対する道徳の危機的状況（moral panic）と類似するところがある。下流階層においては、非正規雇用や契約雇用、アルバイトといった雇用形式が「フリーター」という流行語が普及する以前からもいたって普通な雇用形式であった。だが、メディアによって問題として扱われてこなかった。「フリーター」が問題視されるようになったのは、中流階層でも一般化してからである。つまり、当然とされていなかった集団にまで広がって初めて問題として見なされるようになったのである。新しい名付けが元々特定の集団・地域においてことに多く使われていたが、本研究のデータはそれを示すのに適したものではない、という可能性もある。小林（2009）が正しければ、新しい名前が普及し出したのは早ければ1990年代である。もし小林が正しいとすれば、本研究に取り扱ったデータは直近３年間の広報誌のみとなっているため、名付けの変化の途中経過を示しているよりも、名付けの変化の結果を反映している。現在、新しい名前がどれほど浸透しているのかを示すという点では、本研究には十分に意義があるが、過去に遡るデータを追加することにより、改めて地域差が発見される可能性がある。

参考文献

赤枝尚樹（2011）．都市は人間関係をどのように変えるのか――コミュニティ喪失論・存続論・変容論の対比から　社会学評論，**62**(2)，189-206.

Carroll, T.（2013）. *Language planning and language change in Japan: East Asian perspectives*. London: Routledge.

Cheshire, J. A., Longley, P. A., Yano, K., & Nakaya, T.（2014）. Japanese surname regions. *Papers in Regional Science*, **93**, 539-555.

円満字二郎（2005）．人名用漢字の戦後史　岩波書店

日高貢一郎（2005）．方言によるネーミング　日本語学，**24**(12)，27-41.

本田明子（2005）．赤ちゃんの名付け　日本語学，**24**(12)，54-62.

いい名前ネット（2007）．出生届けの記入例　（2007年）〈http://www.iinamae.net/knowledge/kinyuu.html〉（2016年10月１日）

Ishida, H., & Slater, D. H.（2011）. Social class in Japan. In H. Ishida & D. H. Slater（Eds.）, *Social class in contemporary Japan: Structures, sorting and strategies*（pp. 1-29）. London: Routledge.

住民票ガイド（2014）．Q．出生届けの書き方・記入例・期限・提出先を教えてください　住民票ガイド（2014年）〈http:// 住民票 .com/?p=2309.〉（2016年10月１日）

寿岳章子（1990）．日本人の名前　大修館書店

金沢裕之（1991）．言語意識と方言　徳川宗賢・真田信治（編）　新・方言学を学ぶ人のために　世界思想社 pp. 117-131.

小林大祐（2001）．名前の社会学的分析に向けて：漢字がつくる同一性のなかの差異　評論・社会科学，**65**，23-41.

小林康正（2009）．名づけの世相史 「個性的な名前」をフィールドワーク　風響社

小森由里（2002）．Trends in Japanese first names in the twentieth Century: A comparative study　国際基督教大学学報．III-A，アジア文化研究，**28**，67-82.

熊谷文枝（2011）．世帯構造にみる日本の地域的多様性　熊谷文枝（編）　日本の地縁と地域力――遠隔ネットワークによるきずな創造のすすめ　ミネルヴァ書房 pp. 15-31.

Lieberson, S.（2000）. *A matter of taste: How names, fashions, and culture change*. New Haven, CT: Yale University Press.

明治安田生命（2015a）．名前ランキング2015――生まれ年別名前ベスト10――女の子　（2015年12月２日）〈http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html〉（2016年２月29日）

明治安田生命（2015b）．名前ランキング2015――生まれ年別名前ベスト10――男の子　（2015年12月２日）〈http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/boy.html〉（2016年２月29日）

Mock, J.（2016）. Smart city—Stupid countryside: Social and political implications of the urban/rural split in Japanese education. In J. Mock, H. Kawamura, & N. Naganuma（Eds.）, *The impact of internationalization on Japanese higher education: Is Japanese education really changing?*（pp. 191-206）. Rotterdam: Sense Publishers.

Murphy-Shigematsu, S.（2000）. Identities of multiethnic people in Japan. In M. Douglass & G. S. Roberts（Eds.）, *Japan and global migration foreign workers and the advent of a multicultural society*（pp. 196-216）. London: Routledge.

内閣府（2016）．平成28年版 少子化社会対策白書（全体版〈HTML 形式〉）　内閣府　2004年９月９日〈http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2016/28webhonpen/index.html〉（2016年10月27日）

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., Uchida, Y.（2015）. Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, **6**, 1490.

大藤修（2012）．日本人の姓・苗字・名前――人名に刻まれた歴史　吉川弘文館

Plutschow, H.（1995）. *Japan's name culture: The significance of names in a religious, political & social context*. London: Routledge.

佐藤稔（2007）．読みにくい名前はなぜ増えたか　吉川弘文館

西東社編集部（2014）．赤ちゃんの名前ハッピー漢字事典　西東社

清水章充（2016）．コピーライターが教える 子どもを幸せにする名づけのコツ　学研プラス

Slater, D. H.（2011）. The "new working class" of urban Japan: Socialization and contradiction from middle school to the labor market. In H. Ishida & D. H. Slater（Eds.）, *Social class in contemporary Japan: Structures, sorting and strategies*（pp. 137-169）. London: Routledge.

田中ゆかり（2011）.「方言コスプレ」の時代――ニセ関西弁から龍馬語まで　岩波書店

徳田克己（2004）．名づけの心理２：読みにくい名前の分析　日本教育心理学会総会発表論文集，(46)，623.

角田文衛（2006）．日本の女性名――歴史的展望　国書刊行会
Unser-Schutz, G.（2012, January）. Assessing the difficulty of reading recent Japanese names. Paper session presented at the American Names Society, Portland, OR.
Unser-Schutz, G.（2014a, November）. Recent Japanese naming practices and the role of important others in selecting names. Paper session presented at the Anthropology of Japan in Japan, Nagoya.
Unser-Schutz, G.（2014b, January）. Selecting data on names: City newsletters as a resource for Japanese names research. Paper session presented at the American Names Society, Minneapolis, MN.
Unser-Schutz, G.（2015）.「キラキラネームといわないで！」:新しい名前に対する評価とその現象に取り巻く言説　立正大学心理学研究所紀要，**13**，35-48.
Unser-Schutz, G.（2016）．現代日本における名付け事情とその変遷－ジェンダーという側面から　立正大学心理学研究所紀要，**14**，88-99.
Unser-Schutz, G.（2017）. Evaluating contradictory hypotheses on the effects of regional differences in the selection of novel naming patterns in Japan. *Orientaliska Studier*.（147）, 55-74.
柳田国男（2014）．日本の昔話と伝説:民間伝承の民俗学　河出書房新社
安岡孝一（2011）．新しい常用漢字と人名用漢字 漢字制限の歴史　三省堂

注

1）本論文は英文の Unser-Schutz（2017）を基に大きく改正したものである。

2）本研究は JSPS 科研費70632595の助成を受けたものである。

要　約

近年においては、名付け習慣が大きく変化しており、名前特有の接尾辞や従来の構造的特徴が少なくなってきている。一方、読みを工夫した漢字用法を用いた名前は増えている。名付けのこういった変化は問題視されており、メディアで幅広く取り上げられている。だが、全国的に見られる傾向なのかは未確認である。本研究では、12か所の市町村の広報誌をデータとして用い、近年の名付け習慣における変化を確認した。漢字の用法により抽出された1,573個の名前は「不透明群」と「透明群」に分類された。分析の結果、読み方が不透明で読みにくいと推測される名前が全名前の50％以上を占めており、全国的に頻繁に見られることが確認できた。また、市町村による差がほとんど見られず、読みにくい名前の分布には地域差が認められなかった。地域差が見られなかった理由として、人間関係における変化の他に、名付けの際に活用できる情報における変化が挙げられる。ことにインターネットを通したランキング情報の普及により、人々が名付けにおける流行に対して敏感になっており、名付けの際に他者との比較の中で名前を選択することが一般化しているであろう。

キーワード：キラキラネーム、DQN ネーム、命名、名付け、漢字、地域差